

小杉 愛 氏（新潟県燕市）



小杉氏

・JA女性部では、みそ作りグループを結成。地場産大豆を使ったみそは好評で、その後に始めた市民対象のみそ作り講習会とともに現在も継続。自園においては、付加価値の向上、規格外品の有効利用のため、直売や農産加工を開始。漬物や食品乾燥機を活用した切干大根、ドライフルーツ等は消費者からの人気が高く、売り上げを徐々に伸ばしている。

・農家に嫁ぎ、夫とともに長年、果樹栽培に従事。70歳の時に経営主となり、周囲の応援を得ながら長女とともに果樹栽培の技術を習得し、生産性の低い老木の改植や消費者ニーズに対応した新品種の導入に積極的に取り組む。近隣で耕作ができなくなったなし園地を引き受け、経営規模を拡大。



規格外果実を活用した
和梨のドライフルーツ



畑の朝カフェ

・消費者とのつながりを深め「笑顔の実る農園」を目指して、「畑の朝カフェ」（果樹の収穫と地場産洋食器を使った朝食会）や「収穫祭」（小杉農園独自の取組：果物狩りやステージ催し）など、自園を会場としたイベントの開催を続けている。

・JA女性部（旧燕地区）の部長、地域のJA園芸部会（旧燕地区）の部会長として活動を牽引し、地域活性化に貢献。

・農村女性の経営・社会参画、担い手育成に貢献できる農業者として県から「新潟県農村地域生活アドバイザー」の認定を受ける。また、農業体験や農産物加工などの「わざ」を次世代に伝えていくインストラクターである「にいがた『なりわいの匠』」として県から認定。

・「手間や労力がかかっても子供達の一生に残る体験になるかもしれないから」との思いから、小学校の学童農園における野菜栽培・たくわん作り体験の指導や、中学生の果樹作業体験授業の受け入れを継続的に実施（燕市内の4中学校から10年以上にわたり受け入れ）。



中学生の収穫体験

貝瀬 節子 氏（新潟県南魚沼市）



貝瀬氏



素材にこだわったジェラート

・義父から酪農経営を継承し、夫と経営を開始。乳牛3～4頭から徐々に頭数を増やし、最大で50頭を飼育。平成8年からは大崎ダム里宮公園にて、休日限定でそば等の販売を開始。やりがいを感じ、徐々に手づくり品を増やして食品加工技術を磨いた。

・八色の森公園の周辺開発の話が持ち上がった際、役場職員から「公園の近隣で牛乳を使った商品を扱う店を始めないか」と声がかかった。同時期に長野県への視察においてジェラートに出会う。新潟県内の近隣地域ではまだ販売されていない新規性、かつ乳製品の中では生乳を無駄なく利用できる商材と考え、ジェラートでの出店を決意。

・酪農家5軒でジェラート店の運営主体となる「ジェラート製造販売組合」を組織し、平成13年、自家生産の生乳を使用したジェラート店「ヤミー」を出店（酪農家によるジェラート加工・出店の県内第1号の事例）。

・かぐら南蛮、八色西瓜等の地元産の素材を使用し、素材の味を活かしたジェラートになるよう工夫。生乳には特にこだわり、酪農経営を廃業した後も、地元の酪農仲間の生乳を使用。

・新商品の開発に向けて、自ら酒蔵へ日本酒を使用したジェラートを提案し、酒蔵とコラボした商品を販売。また、店舗販売に加え、地元の小売店10店舗、スキー場（冬季のみ）、インターネットでも販売。



日本酒を使用したジェラート

・女性農業者グループ等の視察受け入れや講演活動を数多く行い、起業家として後進人材の育成に尽力。

・「新潟県農村地域生活アドバイザー」に認定され、県連絡会の副会長を務めたほか、JAみなみ魚沼女性総代、大和商工会理事、JAみなみ魚沼地域づくり委員会の委員を歴任し、地域の発展に寄与。

・地域とのつながりも深く、地元の小・中学生の職場体験等を毎年受け入れており、地域の子供たちへ食品加工販売業に関する学びの場を提供。

小川 好美 氏（富山県朝日町）



小川氏とプチヴェール

・平成10年に就農し、朝日町で初めて家族経営協定を締結。就農条件の整備や役割を明確にし、後の法人化に引き継がれるとともに、話し合いを中心に夫婦、姉妹、親子が対等な立場で経営に関わるスタイルを生み出した。

・平成17年に法人化した「アグリおがわ」の取締役として園芸部門及び経営事務全般及び労務管理を担当し、農業経営の発展に貢献。令和3年度には約87ha、従業員・パートを5名雇用するなど、JAみな穂管内でも有数の大規模法人に発展している。

・就農と同時に、女性が中心となって取り組める園芸品の導入を家族に提案し、水田作経営の複合化の先導的な役割を担ってきた。

〈プチヴェール〉平成20年に系統出荷団体「プチの会」を7戸の生産者で結成。栽培技術の定着や販売の推進等、産地形成に大きく貢献。市場出荷の他、直売所での販売に加え、県内のフレンチレストランに品質が評価され取引が始まるなど、町内外の飲食店へ食材として供給。

〈ラズベリー〉平成26年に県内20名の生産者で結成された「富山県ラズベリー研究会」の会長として栽培技術確立と販路開拓に貢献。現在、近隣市町の飲食店、洋菓子店、アイスクリーム店等の7店舗と直接取引を行っている。



ラズベリー



柿じまん（柿酢入り調味液）

・朝日町特産あさひ柿で作られている「柿じまん（柿酢入り調味液）」の製造を継承するため、平成24年に新たな農産加工グループ「美の里じまん」を結成し、営業活動の強化により朝日町だけでなく入善町の学校給食、地元温泉旅館の料理などへも採用されている。

・里芋コロッケを製造する「百笑一喜」やJAみな穂農産物直売所「あいさい広場」への野菜供給を図る「おいしい野菜部」など、意欲的な女性農業者が活動する組織活動に参加し、町の境界を越えた会の活動の盛り上げや仲間づくりなど、女性起業活動を支える存在として広く貢献。

高木 純子 氏（石川県七尾市）



苗を買いに来た客と話す高木氏（左）

・平成10年に石川県に移住。農産物の加工品を手掛ける有限会社にて新たに立ち上がった花壇用苗部門の責任者に抜擢され、経理、営業を担当し、苗生産コスト計算や販売予測等の経営感覚を身に着けた。

・平成16年、植物園を運営する七尾市内の会社へ転職し、花き生産や体験教室、直売所部門の担当となるとともに、同社が経営する植物園で定期的に営業されていた農家レストランの運営に携わり、人や地域とのつながりを広めていった。

・平成26年4月、中能登地域初の苗専作農家として独立就農を果たした。

・就農当初は、花壇用苗や家庭菜園向け野菜苗の生産が主体であったが、高い技術力を見込まれ、地元JAからの要請もあり、野菜・花き農家向けの苗の販売を開始した。農家向け苗は小ロットからの受注、品種の希望についても可能な限り対応し、年間およそ20軒の農家に苗を届けている。現在、ホームセンター、JA直売所、農家向けに多品目の苗を受注生産している。

・地元町会等が行う花壇づくり、小学校のグリーンカーテン等の緑化活動に参画するほか、寄せ植えやフラワーアレンジメント教室の講師を引き受けるなど、花と緑の普及にも貢献。



タマネギの苗（上）とパンジーの苗（下）

・七尾市、中能登町の農業者で構成される「ななか農業振興協議会」副会長、同女性部会長、「七尾鹿島フラワーメイツ」役員のほか、県組織「いしかわ農業振興協議会」女性部理事を歴任し、女性農業者のリーダーとして活躍。



ハウスに並ぶさまざまな苗

山内 正博・百合子 夫妻（福井県勝山市）



山内夫妻とキク

・百合子氏は昭和51年、正博氏は昭和54年に就農。農作業のうち腕力が必要なものは正博氏が行うが、それ以外は夫婦共同で行っている。平成19年には家族経営協定を締結し、夫婦共同で農業経営改善計画の認定申請を行った。

・農業経営の中心となっているキク等の規格外品の有効利用を目的に、昭和54年に集落の農村婦人グループの仲間に呼び掛け、直売所「大渡ふれあい市場」を開設。

現在は正博氏が代表となり、メンバーの協力を得ながら夫婦2人で二人三脚で運営している。

・キクを割安な価格で販売して看板商品となっているが、客のニーズに対応した野菜の栽培・販売をメンバーに勧め、実践してもらうことで野菜の売れ行きもよい。近隣の市のほか、石川・岐阜・愛知県からも来客がある。

・直売所の店番はメンバーが当番で行っており、客と親しくなることで農産物の作り甲斐を感じたり、客との対話からヒントを得て今後生産する品目を検討したりと、販売の経験が生産にプラスになっている。

・百合子氏は、昭和58年ごろ勝山市の女性中核農家10人で立ち上げた「あぜみち研究会」に参加し、イベントなどで地元の消費者に減農薬農産物を食べてもらい販売促進につなげるPR活動を、自らが中心となり行ってきた。



「大渡ふれあい市場」の外観（上）と
福井県奥越産のいろいろな商品（下）

・昭和58年から県の食生活改善推進員として活動。平成11年度に県指導農業士に認定され、奥越地区指導農業士会の副会長、県の役員（理事）を務め、後進の育成に努めた。

また、平成16年から現在まで勝山市の農業委員を務め、今年で16年目となる（22～24年は休止）。

・正博氏はJA福井県奥越キク部会の部会長を務めるほか、民生委員（約9年）や勝山市の「障害者の親の会」の会長を50年近く務め、地域の福祉施設にキク栽培の指導に行くなど地域福祉にも貢献。



直売所向けの野菜